

クラッシー文芸

■くすの実俳句会

標も歩けぬ白といふ世界

農棄てぬ冬野の中の一軒

休み田に冬野の兆し草の

色 鍋島 翔山

風通る道のありしか片紅

葉 野崎万智子

初氷木の葉抱きて光りぬ

る 松尾アサ子

冬の川流れを止めて橋普

請 青木 早弓

■立花俳句会(11月)

柿三つ竿の届かぬ木守柿

花八手ここに植えたる覚

えなく 西島志乃美

年の暮寺の鐘にも愁ひあ

り 橋本ミユキ

天高く山のキャンパス紅

葉濃き 深町 和子

九年庵の苔にもみじの一

と葉散る 中村テルコ

紅葉路掃くを惜しみて秋

を愛づ 末継ミヨ子

抱きし孫芋の葉揺れに首

を振る 武田 行夫

老二人脳トレパズル秋の

宵 原 宣子

■ひろかわ俳句会(12月)

山里は冬一色に染まりを

り 酒井 司

大雪や笠かぶせたき道祖

神 一瀬砂智子

「不器用でごめんなさい」

と毛糸帽 美座 時朗

行列の牡蠣小屋五軒海光

る 原口あつ美

ライバルの友の訃報や冬

銀河 水本 艶子

日向ぼこ生きてる證の爪

を切る 御厨とみ子

月 吾老いし八日も遠し十二

寒月や雲一片もよせつけ

ず 山崎 陽子

■陽泉俳句会(11月)

日が沈む光 一条冬野切

突然の友の訃報や時雨来

る 吉泉 守峰

この一歩踏むをためらふ

散り紅葉 荒川ミヤ子

城後 正子

混雑の人の隙間の薄紅葉

大坪 清香

地図になき径を歩いて柿

紅葉 大坪 延子

秋の暮緞拭く時や心満つ

倉ノ下和代

森行けば落葉に落葉積も

りをり 中村 境子

■八女睦句会

席移しそこにもありし隙

間風 堤 呼秋

芥子にて酒の引き立つお

でんかな 松尾 貞義

築五十年来し方運ぶ隙間

風 城戸 和子

玻璃越しに四温の日射し

たつぷりと 大坪 栄子

LEDの明かりに集ふ冬

の夜 伊藤 幸子

工事中迂回強ひらる年の

暮 穴見ミキエ

川上へさざ波ははる冬の

川 牛島佐智子

おでん鍋心安らぐ夕餉か

な 山口 弘子



楽しい絵手紙



八女市稲富

伊藤 幸子

はつらつ絵
手紙教室に入
会して、捨て
きれずにいた
子供の使い残
しの絵の具も
日の目を見る

事になりました。鋏と鎌しか持った事のない私、葉書一枚に四苦八苦、先生の手ほどきでどうにか絵になった十二枚を選びマイカレンダーを作りました。何時か友達に季節の便りを出せるようになりたいと思います。葉書一枚に構図、色の濃淡、語句の入れ方、回を重ねる毎に奥の深さを痛感しています。

今年は古稀。「七十の稽古始めの絵筆かな」下手だけど無心に描く一時が好きです。「下手の横好き」。教室の皆さんと楽しくおけい古に励みたいと思います。

ベターホームの楽しい cooking

とり肉と大豆の和風煮

好評
発売中

かんたん美味6
¥1296
(税込)

本や調理道具のカタログは送料無料でお届け。お気軽にご請求ください。
〒810-0001 中央区天神2-13-17 ベターホーム宛

材料(4人分)

とり手羽中(スペアリブ)
.....20本(350g)
しょうゆ.....大さじ1/2
ゆでたけのこ.....150g
大豆(水煮).....150g
しょうが.....1かけ(10g)
サラダ油.....大さじ1
湯.....カップ2
酒.....カップ1/2
砂糖.....大さじ2/3
しょうゆ.....大さじ2
みりん.....大さじ1

作り方

- ① 肉にしょうゆをもみこむ。
- ② しょうがは皮をこそげ、薄切りにする。たけのこの穂先はくし形に切り、残りは2〜4つ割りにし、1cm厚さに切る。
- ③ 鍋に油を温め、肉の表面を焼く。焼き色がついたら、しょうがとAを加える。沸とうしたらアクをとり、ふたをずらして中火で約5分煮る。
- ④ ③にたけのこ大豆を加える。ふたをずらしてのせ、中火でさらに約10分煮る。(時間があれば、ふたをとって汁気がほとんどなくなるまで煮ると、つやよく仕上がります)

●ベターホームの本のお申込みは、電話、FAX、インターネットで受付中。
☎092-714-2411 FAX092-711-7830
URL <http://www.betterhome.jp>

■八女紫苑句会

堤 呼秋選

ザクと踏み笑ひたくなる

霜柱 松崎 伸子

小春日や愁ひを帯びる夢

二展 松延みさと

山男化粧の奴村祭り

牛島 景子

橋の丹にまさる紅葉の彩

映ゆる 堤 多鶴子

尊孫生る春まで待ちの初

対面 田中サトリ

賑にぎと迷ひ箸しておで

ん鍋 中川原篤子

■立花短歌会(十二月)

足傷め歩けぬ苦しみ身にしみる事故は一瞬あとは不

自由 中村サチ子

風無きにハラハラと散る山紅葉参道埋めて神殿へと

誘う 野中 裕政

雨風に吹き飛ばされて舞う枯葉次の命へバトン渡し

て 中島 睦美

風寒くふところ寒き年の瀬の選挙に元気な先生駆け

る 田中たつじ

北風に吹かれ舞い飛ぶ柿の葉はうすくれないの色を

残して 松尾ミサキ

真夏日には日傘となりいし白モクレン一夜の風雨に

その葉落せり 橋本 泰州

耳納よりの北風強き今日もまた年賀欠礼の知らせ舞

い込む 井上 精

風に乗り巷に拡声器は響くなり未来を決める声とし

て聴く 鶴 隆治郎

九州屈指の秘境祖母山



た。メンバーは私と4人のわけもん、朝7時標高600mの登山口をスタートする。

目指す左手に天狗岩から右端に祖母山の稜線がそびえる難ルートだ。川上溪谷沿いにトレイルが始まり、素晴らしい溪谷美を堪能。その後は遠々と続く急勾配に下半身が悲鳴をあげる。

それでも第一のピークの天狗岩の岩峰に立つと、目がくらむような高さだった。その後はゆるやかな稜線歩きのはずだが、I氏の足がけいれんし大粒の汗が落ちる。何度も休憩しながら彼の「大丈夫です、行きます」の声に再スタートする。最後は難関の崖登りだ。梯子とロープを使い高度を上げると「やっと着いたバイ！」。なんと5時間30分も

眩き

孤独死と呼ばないで

お隣の庭を挟んで建つ和子さんの家から灯りが消えて一年。雨戸を閉めながら、和子さん早く良くなつてね!と、声に出して言うのが、私の日課となった。

膠原病の和子さんを支えてきたご主人が癌に倒れ、呆気なく亡くなって五年が経つ。暫らく落ち込んでいた和子さんだったが、「自分は我が儘だから娘と同居は難しい。ヘルパーさんとお弁当の宅配を利用して、何とか一人でがんばってみるわ」と、明るく話した。時々、得意の御点前を披露してくれ、私たちをお抹茶でもてなしてくれた。

花の季節、近くの桜並木を巡るドライブに誘った。迎えに行くとき、お洒落をして門まで出て待っていた和子さん。「嬉しくて昨夜は眠れなかった」と、一言、少女のようにはにかみながら話した顔が忘れられない。

和子さんの家に救急車が来たのは去年の二月。ヘルパーさんが訪れた時、和子さんはすでに意識不明で居間に倒れていた。

その日から和子さんは眠り姫となった。洗濯を干しながら、元氣?と手を振り合ったお隣のベランダが、やけに遠い。

ヘルパーさんの来るのが少し遅かったなら孤独死だったね、と、言う人もいる。でも、私はそうは思わない。独居の者が、誰にも看取られず旅立つことを孤独死と呼ぶのはもうやめよう。日々、周りの人々と暖かな繋がりを持って生きていた人が、偶々、人生最後の瞬間一人だった、と、言うだけの事だから。夏生